

「実践報告」

## ちがいを理解し互いに認め合える学級づくりのためのアプローチ

### —かかわりを深化する活動の実践を通して—

下田 みのり（長崎大学大学院教育学研究科）

内野 成美（長崎大学大学院教育学研究科）

立岡 昌文（長崎大学大学院教育学研究科）

#### I. 問題と目的

平成 29 年に小学校学習指導要領が改訂され、特別活動編においては、「社会参画」・「自己実現」と並び、「人間関係形成」に関する資質・能力の育成が重視されている。「人間関係形成」とは、「集団の中で、人間関係を自主的、実践的によりよいものへと形成するという視点」で、「属性、考え方や関心、意見のちがい等を理解した上で認め合い、互いのよさを生かすような関係をつくることが大切である」と説明されている（文部科学省、2017）。

児童は学級での友達とのかかわりの中で、人間関係を築く力を身に付ける。水野（2013）は、「小学校で人間関係を育てる場は学級である」と述べている。児童が一日の大半を過ごし、人間関係形成の能力を高める場でもある学級は、全員が居心地がよいと実感できる必要があると考える。藤波（2005）は、「どの子どもも自信をもち、他者から認められ、ありのままの自分で過ごすことができる居心地のよい学級づくりが必要である」と説明し、居心地のよさを実感するための要素の一つに、他者から認められることを挙げている。また水田（2005）は、どの子どもにとっても居心地のよい学級にするためには、「子どもたち同士の間人間関係づくりを意図的に行い、互いのよさを認め合える人間関係をつくっていくこと」が必要であると述べている。

互いに認め合う活動を継続することの意義を、佐々木（2011）は、「互いのよさを認め合い、自分自身を見つめ、自分の姿や友だちの姿を鏡としながら、自分の存在を確かにしていくことは、ありのままの自分を認め、よりよくなろうとする心を耕すことに結びついていく。」と述べ、自尊感情や自己肯定感の高まりにもつながるものであると説明している。

このように、互いに認め合うことは、人間関係を築く上で、大切なことである。しかし中には、他児と同じようにできないことや個性を認めてもらえないことが要因となり、学級に居心地のよさを実感できない児童もいる。

そこで本実践研究では、人間関係形成に資する資質・能力を高め、居心地のよい学級集団をつくる手段として、ちがいがあることを理解し互いに認め合うためのアプローチを多面的に行い、その効果の検証を行うことを目的とする。

## Ⅱ．実践研究の方法と概要

〔対象：X県内A小学校3年B組（男子14名、女子15名、計29名）〕  
〔期間：201X年4月～201X年11月〕

はじめに、行動観察、担任教師へのインタビュー、質問紙調査（Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート、ソーシャルスキルアンケート、はなまるアンケート）を実施し、学級全体と個々の児童について細やかな実態把握を行った。次に、実践1では構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた児童同士のかかわりを深化させる短学活の実施を、実践2では自己表現を後押しする国語科の授業及び、実践1よりもかかわりの質を高めることを目指した短学活を実施した。合わせて、常時活動として、助け合いや認め合いにつなげることを目指した「ありがとうの取組」を実施した。その後、実態把握で用いたものと同様の調査を実施し、効果の検証を行った。

### （1）実態把握

児童の学級適応と学校生活意欲の測定に、標準化されている心理尺度「Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート」（河村、1998）を、また対人関係上のマナーを守り、自他を尊重するために必要な「配慮のスキル」と学級の友達と能動的にかかわるために必要な「かかわりのスキル」の測定に、河村（2001）を参考にした、「ソーシャルスキルアンケート」を用いた。また、「自己紹介シート」や「はなまるのいいところアンケート」を用いて、児童の友人関係の把握に役立てることにした。加えて、担任教師へのインタビューや行動観察を組み合わせ、学級全体と児童一人一人の実態把握を行い、対象学級に必要な取組の選定に役立てた。

### （2）実践1

友達とかかわり合い、互いによく知り合うことを目的として、毎週火曜日の朝の短学活の時間に構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた「はなまるタイム」の実践を行った。実践内容は、かかわりの質を段階的に高めるとともに、居心地のよさを高めるために必要と考える、安心・自己表現・助け合い・認め合いの四つの要素を活動に組み込みながら選定を行った。

#### 「はなまるタイム」とは

ちがいを理解し互いに認め合える学級づくりを行う手立ての実践・検証に向け、毎週火曜日の短学活の時間を用いて行う活動である。児童同士がかかわり合い、互いによく知り合うことを目的とした、構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた実践である。

はなまるタイムという活動名は、対象学級の学級目標である「はなまる」からとった。学年目標は、「さっと動きます」「分かるまで考えます」「やさしく接します」「必ずやりとげます」の頭文字をとった「さわやか」である。学級目標の「はなまる」には、児童が「さわやか」につながる行動を「はなまる」にしてほしいという願いが込められている。

### （3）実践2

「友達とかかわり合い、互いのことよく知り合うこと」と、「人前で自己表現ができるようになることを後押しすること」を目的として、国語科の授業の実践

と構成的グループ・エンカウンターの手法を用いた短学活の実践を行った。短学活の実践内容を選定する際は、実践1と同様に、かかわりの質を段階的に高めるとともに、居心地のよさを高めるために必要と考える、安心・自己表現・助け合い・認め合いの四つの要素を活動に組み込みながら行った。

#### (4) 常時活動

児童同士が認め合い、居心地のよさを高めるためには、助け合いや協力する行動が増えるとよいと考えた。

実践を行った学級では毎日帰りの会の時間に、その日に友達が学級のために頑張っていたことや友達のよいところ、自分が頑張ったことを紹介する時間があった。そこで、頑張りやよさを紹介した後に、学級のために頑張った友達に対して、みんなで「ありがとう」を伝える取組を行った。

#### (5) 効果の検証

実践研究の効果を検証するために、質問紙調査や行動観察、担任教師へのインタビューを行った。質問紙調査は、実態把握で用いた、「Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート」(図書文化)、「ソーシャルスキルアンケート」に加え、実践内容についてや居心地のよさを尋ねる「はなまるアンケート」を行った。

### Ⅲ. 実態把握をもとにした具体仮説の設定

実態把握の結果から、対象学級には①友達とかかわり合い、互いのことよく知り合う活動、②自己表現を後押しする活動の二点の取組が有効だと考えられた。

また、実態把握に加え先行研究等の結果から、居心地のよさを高めるためには、失敗したり、自分の思いや考えを表現したりしても否定されない、認めてもらえる、傷つけられないといった安心感が必要であり、学級がそのような場であれば、議論や話し合いの場で、素直に自分らしさを表現できるようになると考えた。加えて、児童の自己表現の場が増えれば、学級をよりよくしようとする助け合いや協力も増えていくのではないかと予想した。以上の点を踏まえつつ、特に自己表現の場を意図的に増やすことで、互いに認め合う機会も増え、学級集団の中での安心感や安全感につながるのではないかと考えた(図1)。

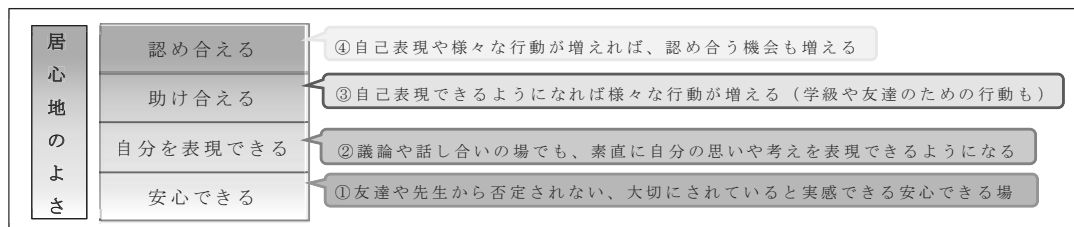


図1 居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素

そして、居心地のよさの要素と考えている、①安心②自己表現③助け合い④認め合いの経験は、児童が何度も積み重ねることが必要で、図2のようなサイクルの中で、居心地のよさが徐々に大きくなっていくのではないかと考えた。そこで、本実践研究では、実態把握から対象学級に必要と考えた「友達とかかわり合い、

互いのことよく知り合う活動」と「自己表現を後押しする活動」に居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素を組み込みながら、段階的に計画して実践を行うこととした。

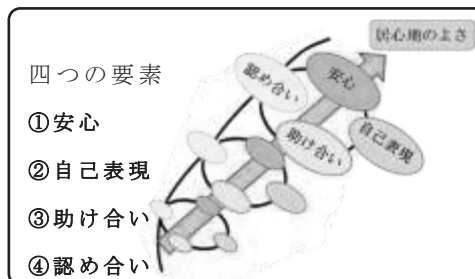


図2 居心地がよい学級へのイメージ

#### IV. 実践の実際

##### (1) 実践1 はなまるタイム1の結果と考察

表1 はなまるタイム1の活動内容

活動内容	ねらい
セブンイレブンじゃんけん	グループの仲間と指の本数を7や11に合わせる中で、相手に意識を向け、周りに配慮をすることを学ぶとともに、友達と気持ちを合わせることの心地よさを感じる。
質問じゃんけん	普段話す機会が少ない友達とも楽しく関わりながら、友達の新たな一面を発見し、もっと関わってみたいと思う。
サイコロトーキング1	ペアの友達と楽しく関わる中で、友達と自分の共通点を探すとともに、ちがいがあることを理解する。
サイコロトーキング2	グループ内の友達と楽しく関わる中で、友達と自分の共通点を探すとともに、ちがいがあることを理解する。

はなまるタイム1では、居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素のうち、特に「安心」と「自己表現」に重きを置いた活動を計画した。

まず、セブンイレブンじゃんけんに関しては、児童同士のかかわりが少ないという実態がある中で、相手に意識を向けること、周りに配慮をすること、友達と気持ちを合わせることの心地よさを感じることは、まだ難しかったと考えられた。また、児童同士が話す場

面は少なく、どうしても普段からよく話す活発な児童が活動を進めることになり、活動に参加するだけという児童も多かったという反省があった。

活動全体を通して見ると、対話が活発になり、徐々に話している相手の方を見て、最後まで相手の話を聴く様子が見られるようになった。また、かかわりが苦手な友達に教えたり、助けたりする様子が見られるようになった。これは、段階を踏みながらかかわりを深化する活動を行う中で、自分の思いや考えを話したり、相手の話を聴いたりする経験を積み重ねた結果であり、約80%に「友達のことを知れた」「知れて嬉しかった(楽しかった)」という記述が見られたように、互いに知り合い、友達と一緒に活動するよさを感じることができたからではないかと思われた。

以上のことから、かかわりを深化する「はなまるタイム1」の実践は、児童がこれまで知らなかった友達の新たな一面や友達の考えを知ることは、嬉しくていいことだという認識をもつことや様々な友達とかかわることの楽しさやよさを感じ取ることができ、児童同士が互いの理解を深めることに効果があったと示唆された。また、かかわりへの意欲を高める効果があったと考えられた。

##### (2) 実践2-1 国語科「きせつの言葉3『秋の楽しみ』」の結果と考察

国語科の時間に、「きせつの言葉3『秋の楽しみ』」(光村3下)という教材を用いて、自分なりの秋の楽しみを文章や俳句で表現する実践を2時間行った。

まず自分なりの秋の楽しみを文章で表現した1時間目の振り返りでは、「みんなの秋の楽しみを知れてよかったです。ぼくの楽しみも話せてよかったです。」

という記述が見られ、授業で身に付けなければいけない内容の理解に加え、自分なりの秋の楽しみを表現できたことに嬉しさを感じることができた様子が伺えた。このように、秋の楽しみを言葉で表現することに前向きな内容の記述が、85.7%の児童に見られた。このことから、まずは秋について学び、その中で自分なりの秋の楽しみを見つけ、文章で表現する活動は、児童にとって、表現することの楽しさやよさに気づき、自己表現の意欲を高めることに効果があったと推察された。また、自由記述では、「学習内容についての振り返り」という項目で振り返りを行ったため、友達とのかかわりに目を向けた振り返りができていた児童は4名にとどまった。

次に自分なりの秋の楽しみを俳句で表現しカルタ遊びを行った2時間目は、「学習内容についての振り返り」の自由記述の中で、友達とのかかわりに目を向けた振り返りができていた児童が、1時間目と比較すると、4名から13名に増加した。また、「秋の楽しみを紹介できましたか？」という項目について◎・○・△の3件法で質問した結果も、1時間目と比較すると、◎の割合が71.4%から88.9%に向上した。加えて、自由記述の内容を詳しく見ると、「それぞれ書いてあることがちがったけど、みんないい俳句ができていてよかった」「同じ季語の人もいたけど、絵札の絵や俳句がちがっていろいろな楽しみ方があって楽しかった」といった内容が見られた。自由記述の項目は、1時間目同様、「学習内容について振り返り」と伝えており、そのような中で、66.7%の児童に、自己表現することをプラスに捉えた様子が伺える記述が見られた。このことから、まず、文章で表現し、その後俳句でカルタをつくって表現するという学習内容が、対象学級の発達段階に沿ったものであったと考えられる。また、今回のように、表現の質を少しずつ上げながら、自己表現する経験を児童が積み重ねることで、自分らしく表現できる楽しさや嬉しさを感じることができ、自分なりの楽しみや表現を友達が聴いてくれる、認めてくれるという安心感が生まれることが分かった。さらに、友達の考えを知ることを楽しんだり、考え方にはちがいがあるということを理解し、それを面白いと感じたりすることができ、友達の「その人らしい表現」を認める意識も高めることができたと思われた。

以上のことから、居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素のうち、特に「自己表現」に重きを置いた、かかわりを深化する国語科の実践は、ちがいの理解や認め合いの意識を高めることに効果があったと推察された。

### (3) 実践2-2 はなまるタイム2の結果と考察

実践1で行ったはなまるタイム1の実践よりも、かかわりの質を高め、ちがいを理解し認め合うための手段として、「無人島 SOS」の実践を計画した。しかし、自分らしい考えを表現するためには、友達がしっかり聴いてくれるという安心感が必要だと考えられた。そこで、まずは「宝島」という活動の実践を行い、自



図3 児童の作品例

分の話を友達がしっかり聴いてくれるという安心感や心地よさを実感できるようにした。

「宝島」では、「活動中見つけた友達のよいところ」についての自由記述で、100%の児童が友達のよいところを記述することができ、「無人島 SOS」でも「アイテムを一つに決めるときに見つけた友達のよいところやコツ」についての自由記述で、100%の児童が友達のよいところを記述することができていた。これは、児童はかかわりを深化する活動経験を積み重ねることで、活動中に自然と友達のよいところに気付くことができるようになり、友達と協働するためにはどうしたらよいかを考えることができるようになった表れと推察された。

また「無人島 SOS」の際に行った「思ったこと」についての自由記述には、「みんなが私の話を聴いてくれて嬉しかった」「考えがちがったけど、なんとか決められた」「いろいろな意見があって面白かった」といった内容が見られ、本活動がちがいの理解につながった様子が伺えた。

以上のことから、かかわりの質を高めること目指し、段階的に内容を選定した「はなまるタイム2」の実践を行うことで、ちがいがあることへの理解やそれを面白いと感じる意識を高めること、自分らしい表現を聴いてもらえる、認めてもらえるという安心感や自己表現を促す効果があることが示された。

また、振り返りシートの結果、「宝島」と「無人島 SOS」では、「宝島」の方が「話すことができた」と実感した児童が多かった。この結果から、まだ自分らしい考えを表現することに抵抗がある児童が一定数いることが伺える。しかし、自分らしい考えを表現した「無人島 SOS」のときの方が、聴いてもらえたと感じた児童が多いという結果も出た。自分らしい考えや表現をしっかりと聴いてもらうという経験をした児童は、自己表現しやすくなるを考える。そこから今回のように、段階を踏みながらかかわりを深化する活動を継続して行う必要があると考えられた。

#### (4) 質問紙調査をもとにした結果と考察

##### ①Q-Uをもとにした結果と考察

「Q-U 楽しい学校生活を送るためのアンケート」結果を実践前（ベースライン期）と実践後で比較すると図3のような結果となった。

図3の実践前（ベースライン期）と実践後と比較すると、全体的に被侵害得点が減少、承認得点が向上し、分布が右上に向かってまとまる形となった。また、分布の変化を見ると、学級生活満足群が7名から13名、非承認群が8名から2名、侵害行為認知群が4名から9名、学級生活不満足群が10名から5名という結果になり、特に非承認群の児童は8名から2名に減少している。

また、承認得点を比較すると、実践の前後では有意な差が見られた（図4）。この結果の背景には、はなまるタイ



図3 Q-Uの比較

ムや国語科の実践を通して、かかわり、知り合う経験や自己表現する経験を積み重ね、互いにちがいがあをることを理解したことで、認め合うと場面が増え、学級の中で承認されたと感じる機会が増えたと考えられた。そして、友人関係に関する得点の比較にも、実践の前後では有意な差が見られた（図 5）。この結果の背景には、かかわり、知り合う経験を何度も積み重ねることで、友達とかかわる意欲を高めたり、協力するよさを感じたりしたことがあると考えられる。

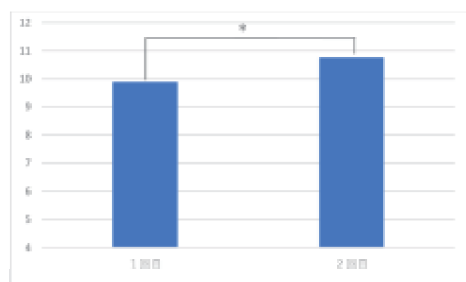


図 4 承認得点の比較 \* :  $P < 0.05$  \*\* :  $P < 0.01$

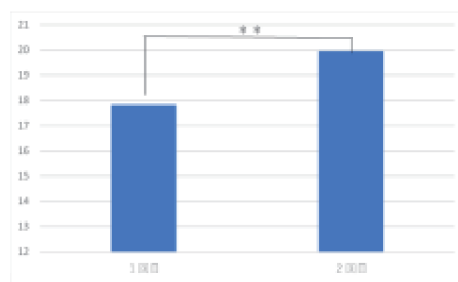


図 5 友人関係の比較 \* :  $P < 0.05$  \*\* :  $P < 0.01$

## ② ソーシャルスキルアンケートをもとにした結果と考察

「ソーシャルスキルアンケート」結果を実践前（ベースライン期）と実践後で比較すると下のグラフのような結果となった。

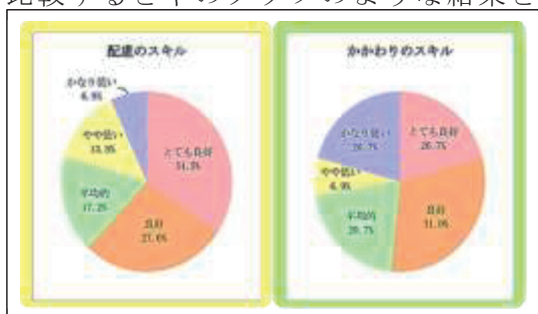


図 6 実践前（ベースライン期） 6/5

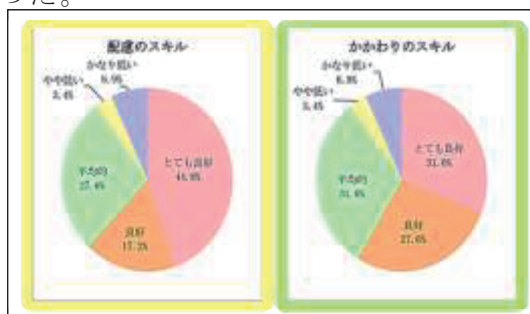


図 7 実践後 11/28

全体的に対人関係上のマナーを守り、自他を尊重するために必要な「配慮のスキル」、学級の友達と能動的にかかわるために必要な「かかわりのスキル」がともに向上していることが分かった。

実践後の結果を見てみると、配慮のスキルについては、課題がある児童が 20.7% から 10.3% に減少しており、実践前（ベースライン期）よりもよりよい状態に変化したことが分かった。かかわりのスキルについても、課題がある児童が 27.6% から 10.3% に減少しており、1 名あたり平均 2.4 ポイントの得点の向上も見られた。特に変化が大きかった質問項目としては、まず「嬉しいときは、笑顔やガッツポーズなどの身振りで気持ちを表していますか」が、平均 2.9 ポイントから 3.4 ポイントへ変化していた。これは、児童が自分の気持ちを表現しやすくなった結果だと考えられる。また「自分だけ意見がちがっても、自分の意見を言っていますか」が、平均 3.0 ポイントから 3.6 ポイントへ、「他の人に左右されずに、自分の考えで行動していますか」3.0 ポイントから 3.5 ポイントへ向上していた。実践前は、何か学級で話し合いをする際、全体的に多数派に同調する児童が多いという学級の実態からみると、大きな変化である。これは、居心地を

高めるために必要と考える四つの要素を組み込んだかかわりを深化する活動を行う中で、互いにちがいがあることに気づき、ちがいを面白いと感じる経験をした、自分の考えを認めてもらったりする経験をしたことが要因の一つになっていると考えられる。

### ③はなまるアンケートをもとにした結果と考察

自己表現について尋ねた結果を見てみると、100%の児童が「とても好きになった」「好きになった」と回答した。自由記述から、「自分が表現することで、相手の意見も知れる」「自分から意見を言ったら、みんながつなげてくれる」など、友達の意見を知ったり、かかわったりするためには、「まずは自分が表現すること」が大切だという気づきをもったことが分かった。また「みんなが分かってくれるから」「『なるほど』『いいね』と認めてもらえる」と、自己表現が友達からの承認される手段の一つになっ

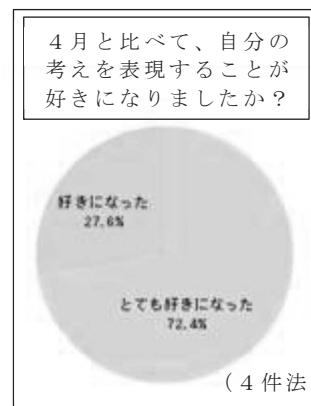


図8 自己表現に関する意識

ている児童や「表現することで安心できる」と自己表現が安心感を得る手段になっている児童がいることが推察された。そこから、自己表現するという活動が、居心地のよさを高める要素と考える、「安心」「助け合い」「認め合い」にもつながる可能性があるかと推察された。

そして、好きになった理由として、「自分の考えを伝えたいから」(A児)、「自分とちがう意見のまま決まって嫌だから、自分の意見を言いたい」(B児)という印象深い記述が見られた。A児は、自分の意見を人に伝えるのが苦手だった児童である。そのような児童が自己表現の意欲をもつことができたのには大きな意味がある。またB児は、別の自由記述(はなまるタイムをやってよかった理由)で、「(はなまるタイムで)友達と意見を言い合って、いろいろな答え、ちがう答えのよさが聴けて楽しいから」と記述していた。B児にとって、はなまるタイムでの経験が、自己表現の意欲を高めることに効果があったと考えられる。これは他児にも見られる傾向である。ここから、はなまるタイムの実践は、児童の自己表現に対する意欲やスキルの向上に効果があったと推察された。

表2 四つの要素について

3年B組にいると安心できる	100%
3年B組は、自分の考えを表現できる	97%
3年B組は、助け合っている	97%
3年B組は、お互いに認め合っている	100%

加えて、居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素についての4件法による自己評価を行い、「とても思う」「思う」と回答した割合を表2に示す。実践前に同調査を行っておら

ず実践前後で比較はできないが、全ての項目に対して非常に高い結果が出た。行動観察でも、実践前に比べると「安心」「自己表現」「助け合い」「認め合い」の四つの要素についての児童の認識は向上していると考えられた。

また、3名分の仲が良い友達の名前とよいところを書く欄を用意した「お友達紹介」を行った結果、実践後の調査では、100%(29名)の児童が、仲が良い友達



を3名書くことができた。実践前の調査では、20.7%（6名）の児童が、1名も仲が良い友達を書くことができず、3名分の名前を書くことができた児童は55.2%（16名）にとどまり、まだ「この人が自分の友達」と自信をもって表現できる児童が少ない様子が伺えていた。そこから、実践テーマである「ちがいの理解」や「認め合い」を進めるためには、まず児童が様々な友達とかかわりよく知り合うことが必要と考え、実践内容の選定を行った。「かかわり、よく知り合うこと」を目的としたはなまるタイム実践を行った結果、100%の児童が、仲が良い友達を書くことができるとともに、友人関係に広がりが見られた。その要因の一つは、アンケート調査で児童の記述に見られたように、はなまるタイムの中で、様々な友達とかかわり合い、知り合うことで、「仲が良くなった」と実感できたからではないかと推察された。

## V. 総合考察

実践研究の結果から明らかになった内容を以下に述べる。

### ① 同じ活動を、質を高めながら繰り返すことがもたらす効果

居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素を意識し、実践を行った。はなまるタイム1では、四つの要素のうち、特に「安心」「自己表現」の要素を高めることを目指し、かかわりの質を少しずつ高めながら、「かかわり合い、互いによく知り合う活動」を実践した。C児の活動後の記述を例に挙げると、「活動して楽しかった（すごろくトーキング1）」という内容から、「沢山の友達ことを知れてよかった（すごろくトーキング2）」へ、友達とのかかわりに目を向けた内容に変化した。これは、他児にも見られた変化であり、同じ活動を、質を高めながら二度行ったことが友達とのかかわりに目を向けるきっかけとなっていると推察された。これは、繰り返したことで、対話の意識が高まり、友達を知ることにつながったからではないかと考えられた。

### ② 「自己表現」と『「ちがいの理解」や「認め合い」』の関連

国語科の実践を中心に、当初ねらっていた「児童一人一人が安心して自分らしい表現ができるようになる」という内容にとどまらず、「自分らしい表現を友達が聴いてくれた」「認めてくれた」と感じる経験を積み重ねる中で、児童は「見方・考え方の違いに気付く楽しさ」や「自分の考えをもって友達とかかわる楽しさ」に気付くことができていた。自己表現することが「ちがいの理解」や「認め合い」の意識の向上に効果があることが分かった。また、はなまるタイム2の活動を通して、自分の話を友達がしっかりと聴いてくれるという経験をし、安心して自己表現ができる素地ができ、自分らしい考えを友達に伝えることができた。その結果、「ちがいの理解」や「認め合い」の意識をさらに深めることができた。それに加え、「友達と協力する楽しさ」にも気付くことができていた。

実践後、自己表現についてのアンケート調査を行った。その結果、100%の児童が、4月と比べて、自分の考えを表現することが好きになったと回答した。さら

に記述を分析した結果、自分から表現することで、友達の考え方を知ることができるといふ認識をもったと考えられた。また、自己表現する中で、「ちがいの理解」を深め、「ちがいがあると面白い、楽しい」といふ認識をもつことができたと思われた。その上、自己表現することで「気持ちをどんどん分かってもらえるようになった」や「なるほど、いいねと言ってもらえる」、「表現することで安心できる」といふ記述から児童にとって自己表現が、友達から承認されたり、安心感を得たりするための手段になっていることが明かになった。

### ③短学活と授業を四つのサイクルで関連させて行うことの効果

最終の実践として行った「無人島 SOS」で、自分らしい考えを全員が表現でき、考えにちがいがある中で、友達と話し合ったり、協力したりするよさを実感できていた。そのような意識の向上を支えたのは、はなまるタイム1やはなまるタイム2の「宝島」の実践を通して、自分の考えや思いを表現しても聴いてもらえるという安心感を得たことや国語科の授業で、自己表現する楽しさに気付き、「ちがいの理解」や「認め合い」の意識を高められたこと、常時活動で「助け合い」や「認め合い」の意識が高まったことがあると考えられる。このことから、「自己表現」に重きを置きながら、居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素を組み込んだ活動を関連させて、意図的・段階的に、そして児童の変容をその都度把握しながら計画的に実施することは、ちがいを理解し互いに認め合える学級づくりに有効だと推察された。

今後の課題としては、以下の二点である。一点目は、タイムマネジメントの意識をもつことである。少しの時間を有効に使って人間関係づくりなどを行うことができるようにしていきたい。二点目は、国語科だけではなく、他教科・領域との関連を考えていくことである。そのため学級づくりを軸としたカリキュラムマネジメントの視点を持ち、様々な教科・領域の中で、居心地のよさを高めるために必要と考える四つの要素やそのサイクルを意識した実践内容を考えていきたい。

また、今回実践を行わせていただいた学級の担任教師は、常に児童を肯定的に捉え、毎時間の授業をはじめ、始業前の活動や休み時間等、仲間づくりや児童同士のつながりを意識していた。また、毎時間の授業は、全ての児童に活躍する場が確保され、安心して学べる環境が整えられていた。教師自身が、児童一人一人の個性やちがいを理解し、児童のよさや「その子らしさ」を認めていた。そのような教師の姿が、今回の児童の変容に大きな効果があったと考える。その姿を一つのモデルとして今後実践を積み重ねていきたい。

### 主な引用・参考文献

- ・河村茂雄（2010）『授業づくりのゼロ段階 Q-U式授業づくり入門』株式会社図書文化社
- ・河村茂雄（2001）『育てるカウンセリング実践シリーズ2 グループ体験による タイプ別！学級育成プログラム 小学校編 ソーシャルスキルとエンカウンター統合』株式会社図書文化社
- ・國分ら（1996）『エンカウンターで学級が変わる 小学校編 グループ体験を生かした楽しい学級づくり』株式会社図書文化社